

金王八幡宮(社務所)

Konnouhachimanguu

No. 15-007-2010作成

新築
その他

発注者	宗教法 金王八幡宮	カテゴリー				
設計・監理	東急建設株式会社 一級建築士事務所	A. 環境配慮デザイン	B. 省エネ・省CO2技術	C. 各種制度活用	D. 評価技術/FB	
施工	東急建設株式会社 東京支店	E. リニューアル	F. 長寿命化	G. 建物基本性能確保	H. 生産・施工との連携	
		I. 周辺・地域への配慮	J. 生物多様性	K. その他		

都会にたたずむ環境配慮型神社

金王八幡宮の歴史

金王八幡宮は、渋谷氏の祖、河崎基家により寛治6年（1092）に創建されたとされる古い歴史をもち、現在の社殿は、徳川家光が3代将軍に決定したとき、守役の青山忠俊が家光の乳母春日局とともに、慶長17年（1612）に寄進したといわれています。その後、社殿はたびたび修理され、現在、江戸時代前期から中期の建築様式を今にとどめる渋谷区指定文化財となっています。平成23年は、御鎮座920年、社殿御造営400年を迎え、その記念事業として、社殿に接続する社務所の建替え工事が現在進行中です。

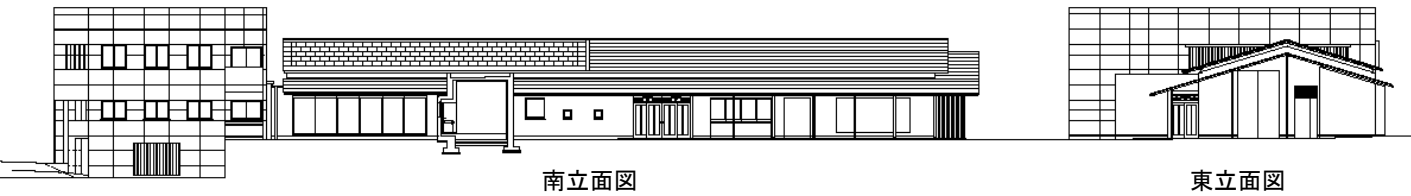
建物概要

社務所は大きく2棟構成になっており、大きな切妻屋根の平屋建て部分とコンクリート打放し3階建て部分からなります。3階建て部分は境内から遠い渋谷駅側の道路沿いに配置し、渡り廊下・平屋の社務所は、軒高を合わせ境内を取り囲み、神殿より低い高さで接続されます。境内を平屋建物が取り囲み、その周囲を木々が取り囲み、その木々の周囲を高層ビルが取り囲む構成は、渋谷駅近くの都会でありながら、明るく大いに自然が感じられる境内になると考えています。

切妻の大屋根には、建材一体型の太陽光発電を設置し、更に、屋根材のガルバリウム鋼板の下には通風層を設け、大屋根で冬場の集熱を行えるようにする等の省エネに配慮しています。また、コンクリート打放し3階建ての屋上のほぼ全面には屋上緑化を施し、省エネを行う予定です。

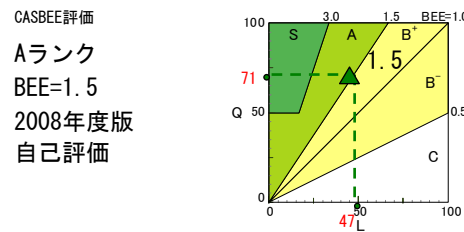
外観計画

平屋建て部分は、切妻の大屋根をシンボルとした和風形態とし、400年の歴史を持つ文化財の神殿と建ち並んでも、神殿より目立ち過ぎないボリュームとシンプルかつ繊細なディテールで計画しています。また、境内から奥側の配置となる3階建て部分は、コンクリート打放しのマッシブな建物とし、周辺の街並みとの調和を図りました。機能的につながる一連の社務所の外観を、全く異なる方法でデザインした対比は、都会に400年の歳月を経た木造建築物がたたずむ姿の対比に重ねています。



参道からの外観

建物データ	
所在地	東京都渋谷区
竣工年	2011年
敷地面積	4,035㎡
延床面積	918㎡
構造	RC造一部S造
階数	地下1階、地上2階



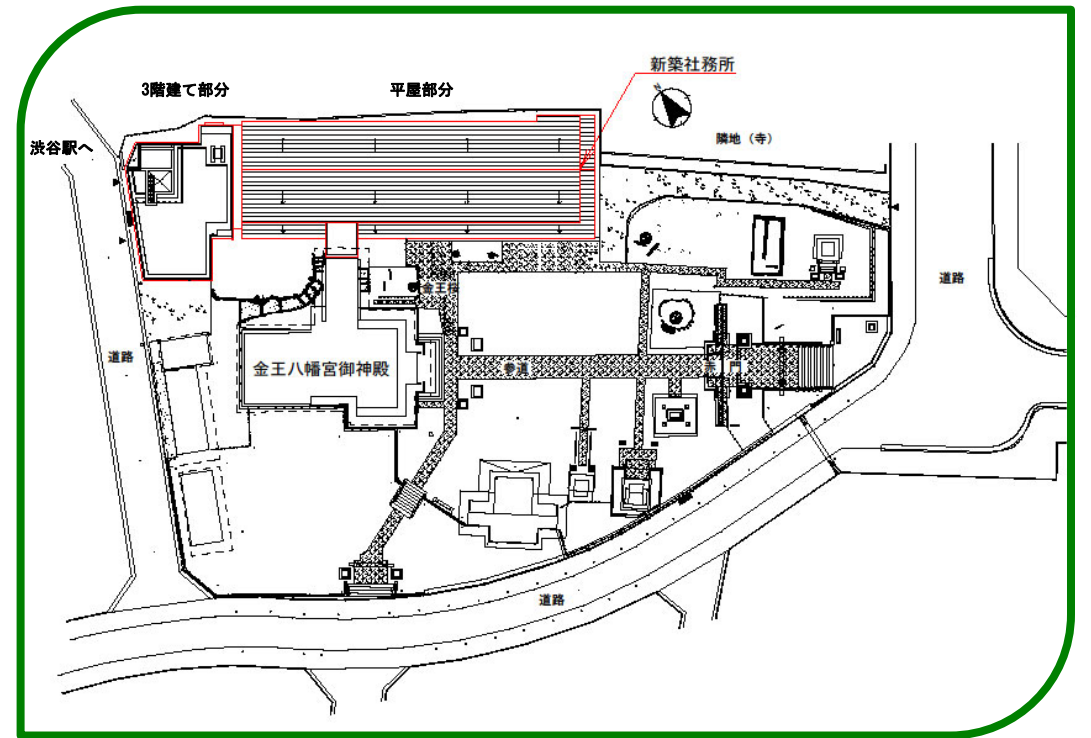
構造的特徴

平屋部分は、鉛直部材として自立RC耐力壁（コンクリート壁200^{mm}および350^{mm}）をX・Y方向にバランスよく壁を配置して鉛直荷重および水平荷重を負担させています。

また、切妻としている屋根面は鉄骨造のRC壁頂部つなぎ梁と小屋組により構成し、軽量化を図るとともに、壁頂部には水平ブレースを設け剛性も確保しています。

基礎は布基礎を採用し、自立壁下に配置し、壁から伝達される鉛直力や水平力が直接地盤に伝わる構造としています。

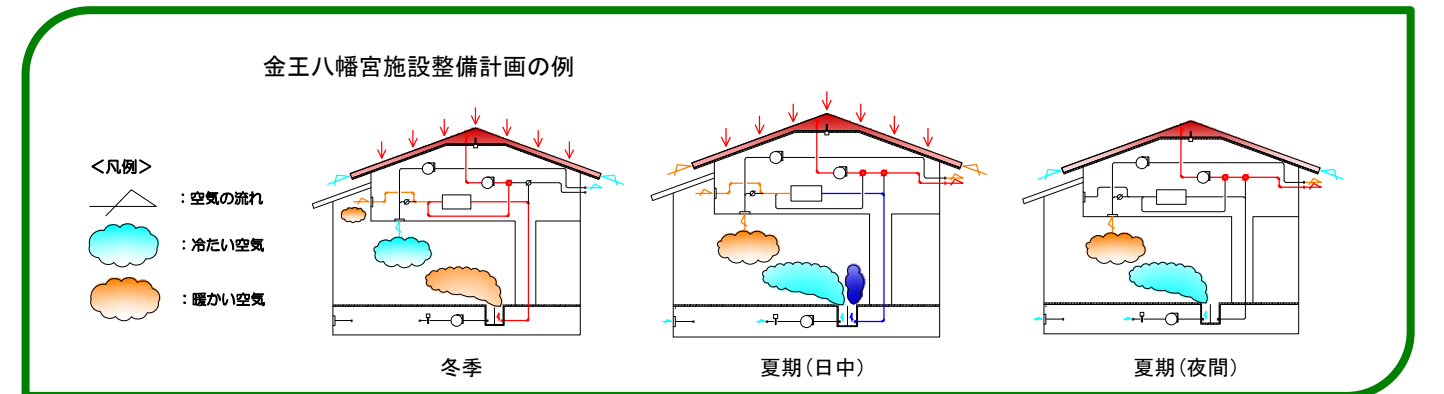
鉛直材を壁とすることで、諸室に柱型を出すことなく計画でき、屋根受け部材を鉄骨としたことでシャープな軒先の切妻を実現しています。



金王八幡宮全体配置図

自然エネルギー利用空調システム

屋根のバッシブ空気スペース（通気層）を使い、太陽熱という自然エネルギーを利用した空調の省エネルギー化を実施しています。冬期の日中は、太陽熱で通気層内の暖められた空気を利用します。通気層内で暖められた空気は、ダクトを経由して床面より吹出し居住空間の暖房を行い天井面より吸込まれます。吸込まれた空気の一部は空調機を通過して再利用され、一部は換気として屋外に排気されます。夏期の日中は、通気層内の熱は排気し、更に天井面を断熱する事で、外部からの熱の侵入を防ぎ空調負荷の低減を図っています。又、夜間はナイトバージを行い翌朝の立ち上り冷房負荷を低減させます。



設計担当者

建築：大野芳俊／構造：安藤秀樹、高師利明
設備：岡本悠、古賀隆文

主要な採用技術（CASBEE準拠）

- Q3. 2. まちなみ・景観への配慮（建物配置や形態のまちなみとの調和）
- LR1. 2. 自然エネルギー利用（自然エネルギー利用空調システム）